

アーティスト参加型の授業改善プロジェクト

造形表現における総合的なものづくり力の開発

建築学科 伊東龍一

建築学科 吉武隆一

1. はじめに

建築学の教育の歴史は長く、古くはローマ時代にまでさかのぼる。有名な建築教育者ウィトルウィウスによると、建築専門家の素養は「多くの学問と種々の教養に具備され」とされ、以後西洋では総合的な教育が重要であると言われてきた。総合性こそ建築ものづくり力の根幹である。

現代日本の大学教育では、建築学は理系に分類されることが多い。しかし、建築意匠においては芸術や思想・歴史等の素養を欠くことができない。一方、工学部にあることが多い大学の建築関係学科には、高校時代に理系科目は学習したが、文系科目や芸術科目をほとんど学んでいない学生が入学してくる。とくに芸術系科目は、受験に必要な主要5科目の位置付けからも外れるため軽視される傾向が強い。

いわゆる受験勉強に集中してきた多くの学生たちにとって、正解が必ずしも一つではない建築学の世界を理解してもらうには、芸術系の授業を低学年のうちに意識的かつ徹底的に行う必要がある。

本稿は、以上のような課題に対して大学1年生に対して行う早期の芸術系教育に関わる授業改善の報告であり、より具体的には複数の芸術系アーティストが参加する授業の効果についての報告である。

2. 対象とする授業1年次「造形表現」の位置づけ

熊本大学工学部建築学科においては、2年次から3年次にかけて「建築設計演習第一」～「同第四」のいわゆる設計製図の授業が、4年次には卒業設計が用意されていて、その他の授業の学習成果を、この設計演習において自ら統合し一つの建築に結実させる、正に教育の根幹を成す授業としている。

今回授業改良の対象とした1年次後期開講の「造形表現」は、2年次以降の設計演習につながる造形演習で、建築教育にとって極めて重要な意味をもつ。

3. 「造形表現」の授業内容

授業の方法は、約60名の1年生（1学年の定員57名、例年過年度生を含む）を3グループに分け、3種のプログラムを経験させる。3種とは、①CADを用いた造形、②基礎造形（デッサンや手を動かしてつくる造形演習）、③模型製作や調査等、その後の設計演習へ直接の繋がる演習で、授業4回と講評会1回からな

る。本稿はプログラム②および③についての報告である。

4. プログラム②：もののけグループ

2011年度までの授業では、第1回にデッサン、第2回以降では具体的なオブジェを等身大以上の大きさで作成してきた。授業担当は、常勤の建築学科教員と美大彫刻学科卒業でランドスケープにも通じたアーティストの非常勤講師であった。これまでの改善点として、イ. より興味を持てる課題とすること、ロ. より自由な発想を可能にすること、ハ. 正解は1つではないことを理解すること、の3点を考えていた。そこで2012年度からの授業では、美大油絵科卒業で、パフォーマンスやイベントの経験が多いアーティストに参加してもらった。

新たな授業内容は、第1回では、これまで通りデッサンを行うことにし、第2回以降では造形課題「もののけの巣」を実施することにした。「もののけの巣」は、学生がもののけのキャラクターを自由に想定し、その巣を工学部敷地内のどこかに設定して、材料・形状ともに自由に造るという課題である。

実際には、第2回の授業では、まず構想を練ってもらった。もののけのキャラクターとその出現ストーリーを考え、巣をつくるに相応しい場所を探すのである。一方この回では、アーティストが自身の作品紹介をした。何もいわないと学生は塊のような作品を造り勝ちなので、形のないパフォーマンスや広がりを感じさせる庭や自然の風で自由に動く作品を見せた。また、造りながらアイデアを考えることの重要性を強調し、手を動かすことを促した。次週までの宿題にはA3サイズ用の紙に作品の構想をスケッチ、模型等を要求した。

第3回の授業は、ひたすら作品の実制作を行うが、学生1人ずつに宿題であった構想を語ってもらい、教員3人で意見や感想の交換を行った。教員が学生にアドバイスはするが、まったく対等な立場で話し合い、教員同士も意見を戦わせる。また、授業中の質問も受け、同様に対応した。そして、このスタイルを、授業のどの回にも徹底させた。

5. プログラム③：3×3×3グループ

2012年度までは、建築学科教員1名による授業を行

っていた。改善点として、イ. 周辺環境への意識を高めるため、敷地調査を行う。ロ. 建築設計の敷地は限定された空間であるので、それを意識した造形訓練が必要である。ハ. 正解は一つではないことを理解できるようにする、ということを考えた。

そこで2013年度からは、常勤の建築学科の若手教員2名に加えて、海外の総合芸術大学卒業の若手アーティストに参加してもらうことにした。イ. に対しては、敷地調査を念入りに行うことで、意識を高められるのではないかと期待した。ロ. に対しては、対象とする敷地を3立方メートル以内、すなわち「3×3×3」に限定することで学生たちに強く意識させることができると考えた。ハ. については、総合芸術大学出身の若手アーティストの刺激によって、また②と③の合同講習会を実施することで達成できると考えた。

まず第一回の授業では、工学部敷地内を自由に調べ、魅力的なスペースを報告してもらった。その際、学生たちはすでに作られているベンチや休憩所などのありきたりのスペースを報告しがちなので、教員やアーティストが選んだ魅力的なスペースや、実際のアーティストの作品を見せることで、解決を図った。第二回の授業では、スチレンボードによる多面体模型作成によって模型作成に必要な、描く、切る、貼るなど図工の基本をおさらいした。

第三回の授業では、予め宿題としていた魅力的な3×3×3の提案内容をA3ケント紙にスケッチ等で用意させておき、授業時間内に建築学科の教員と若手アーティストが一对一で面談する方法で、作業を進めた。第四回もほぼ同様の方法でつづき、最終課題はA2ケント紙に、敷地と模型を合わせたカラージュ写真



図1 鏡の顔をもつ「熊子さん」は、友達の顔が映るとそれを自分の人格と思いこんでいるもののけ。

やスケッチ、図面などで表現させた。

6. プログラム②と③：合同の講習会

講習会は②、③グループが共同で行った。その目的は、全く異なるプログラムであっても、学生ひとりひとりの個性が作品に表現されていることを実感することであり、また多くの教員の感想を聞くことで、正解が一つではないことを理解することであった。

講習の方法は、作品をA2ケント紙のプレゼンしたものを提出させ、そのうちから学生投票によって上位の作品を取り上げ、学生の発表、他の学生や教員との質疑応答を行い、最後に教員が講習を述べた。

6. 授業成果の考察と今後の課題

授業アンケートなどから得られた成果を整理すると、イ. 「もののけ」と「3×3×3」の2つのグループを設定することで、学生たちの異なる個性がそれぞれで発見できた。ロ. アーティストが参加することで、「造形」「美術」「建築」等への学生たちの思い込みから、かなり自由になってもらえた。ハ. 講習会においては、多数講師の意見が対立する場面を見せられ、最も重要な目標は達成できたと考えられる。

反省点として、イ. 講習会以外に、学生同士が互いの作品を見る機会が少ない、ロ. 「もののけ」グループと「3×3×3」グループでは、対象敷地が同じだったため、一部の学生は課題を混同する傾向がみられる、などの問題点が浮かび上がった。以上のことから、本プログラムはまだ改善の余地が残っている。

最後になりましたが、熱意をもってご尽力いただいた吉井講二、岡山直之、吉井万紀子の御三人のアーティストに厚く御礼を申し上げます。



図2 コンクリート実験場の無表情な壁面に巧みに活用した、河川敷のさくらを展望できるスペース。